第 12 回　神奈川摂食・嚥下リハビリテーション研究会 報告書

開催日時：2013 年 3 月 3 日（日）12:45～17:50
開催場所：鎌倉女子大教室棟 ３階 大講義室（神奈川県鎌倉市大船）
テーマ　：嚥下内視鏡検査や嚥下造影検査をリハビリテーションにどう活かすか
参加者　：157 名
主　幹　：湘南地区
共　催　：神奈川摂食・嚥下リハビリテーション研究会
　　ニュートリー株式会社

製品紹介：ニュートリー株式会社

開会の挨拶

望月弘彦（湘南地区世話人代表　クローバーホスピタル）

教育講演（13：20～14：20）

座長 クローバーホスピタル 望月 弘彦
「リハビリテーションに活かす嚥下内視鏡検査」
横浜市立脳血管医療センター リハビリテーション科 高橋素彦先生
概要：

咽頭・喉頭の麻痺・構造、咽頭の分泌物の貯留、実際の食物の嚥下、を中心に嚥下内視鏡検査とリハビリテーションについて、具体的な症例を交えての講演であった。評価項目、適応と行った基本的な項目の解説に続いて、高齢・心不全症例と気管カニューレ装着例の 2 症例について動画を交えての紹介があった。最後に、悪性腫瘍などの器質的疾患を見逃さないことの重要性についても言及していた。

嚥下内視鏡検査についての基本的な理解を深めることができた。活発な質疑応答があり、喉頭蓋変形の影響や麻痺側に浮腫の所見を認めることが多いといった点が追加された。認定士のスキルを向上させる効果があると考えられた。

神奈川摂食・嚥下リハビリテーション研究会 本部からのお知らせ（14:35～14:45）

横浜市立大学附属市民総合医療センター 若林 秀隆

関連演題（14:45～15:25）

「お楽しみ食を安全に」
　湘南ホスピタル栄養科　林　静子先生
「嚥下リハビリテーションからみるＶＦの役割」
　横浜なみきリハビリテーション病院　廣瀬裕介先生

特別講演（15:40～16:40）

座長　クローバーホスピタル　望月　弘彦

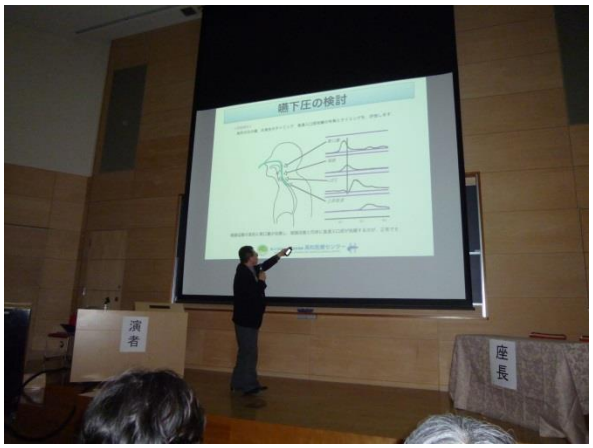
「嚥下造影(VF)からみた嚥下障害の基礎とリハビリ・ケアへの応用」

医療法人　成美会　鈴江病院　脳神経外科部長　七條文雄　先生

概要：

5ヶ所の病院に勤務し、過去約10年の間に390症例、585件の嚥下造影を施行してきた経験を元にした講演であった。演者自身がPCによるVFの動画編集を行いながら検討しており、嚥下造影の具体的な検査方法や画像処理のやり方についても触れていた。解剖学的な基礎知識の整理と嚥下のダイナミックな動きを再認識した上で、個々の症例における嚥下障害の対処法について、分かりやすい講演であった。

通常のX線透視施設があれば、ちょっとした工夫で嚥下音も含めた多元的な検査ができることが良く分かった。動画で提示された症例も豊富で、嚥下造影＋検査時の姿勢＋嚥下音＋音の波形＋時間表示といった多次元での評価が印象的であり、明日からの診療に寄与するものであった。



パネルディスカッション（16：40～17：30）
司会　クローバーホスピタル　望月　弘彦
パネラー　高橋素彦先生、林　静子先生、廣瀬裕介先生、七條文雄　先生

概要：
・高齢患者における、歯の状態と嚥下との関係について
→「可能なら義歯を入れた方がよい。まずは歯科医に相談する必要がある」。その他、舌のリハビリのためにも義歯が必要等の意見があった。
・経口摂取の安全性と栄養摂取の兼ね合いについて
→「限定的であっても経口摂取の可能性がある患者については、安全第一で、胃瘻等で栄養を確保しながら行っている」
・経口摂取時の安全性確認について
「口腔内の状態や全身状態、痰の喀出力などから総合的に判断する。安全確保については多くの職種の協力の下で実施している」。
・外来患者に対する安全に確保についての指導法
「記録票を渡してバイタルや痰の性情等を記録してもらい、外来時にはその記録を確認して指導している」また、「高次脳機能が保たれている場合は、患者が自分なりに安全な姿勢や食べ方を工夫できることもある」との意見もあった。
・ＶＦ，ＶＥの所見を生かした摂食方法は？
→「ＶＦ，ＶＥでは今後改善する余地があるかどうかの可能性や、誤嚥が少ない方法を検査できる。経口摂取を開始したら全身状態を観察しながら進めていく」。なお、進め方としては、「摂取姿勢と安全な食材の二つを、患者の状態に応じて変化させていく視点も必要」との意見もあった。

・ＶＦ，ＶＥの実施法の習得について
「独学で最もよいと思われる方法を編み出した」「最初は先輩から教えてもらい、その後は経験を積んでいった」など。
・ＶＦの実際について
検査者：医師のみ、介護者も入る、看護師も入る、ＳＴのみなど施設により異なる。
造影剤：保険適応外使用とはなるが安全性確保のために第 3 世代ヨード系造影剤を使用、硫酸バリウムとヨード剤を使い分ける、バリウムのみなど、施設によって異なる。
被ばく対策：患者については透視時間短縮、回数減少等。検査者については防護服、立ち位置、ついたて使用等。
・その他、演者からの意見
「ＶＦ，ＶＥは自分でやってみないとわからないので、ぜひ自ら行ってほしい」
「喉頭マイク使用の効果を知ることができた」「ベッドサイドで行えるＶＥを行っていきたい」「ＶＦ，ＶＥを編集しまとめていく作業の大切さ」等。

次回第 13 回研究会のお知らせ
県央地区代表世話人　小泉千秋

閉会の挨拶
クローバーホスピタル　望月　弘彦